CAJ

THE COMMUNICATION ASSOCIATION OF JAPAN

日本コミュニケーション学会
第 45 回年次大会

コミュニケーションとジャーナリズム

Communication and Journalism

南山大学（愛知県名古屋市昭和区）

2015年 6月 13日(土)～6月 14日(日)

June 13-14, 2015

Nanzan University

[大会参加者へのご案内]

1. 受付は、南山大学名古屋キャンパス、B 棟 4 階にあります。会場は同じ棟ですが、それぞれの発表会場へ入る前に、必ず受付にお立ち寄りください。
2. 大会参加費は、2 日間で会員 4,000 円(当日払いは 4,500 円)、非会員の方は 5,000 円です。参加費にはプロシーディングス代を含みます。参加ご希望の方は(会員･非会員同様に)、学会ホームページを通じて、6 月 5 日(金)までにお申し込み下さい。年次大会へは CAJ 学会ホームページより、**オンラインで申込みください。振込用紙は同封しておりません。**
3. 昼食に関しては、大会 1 日目は大学内のカフェテリアは営業しておりますので、そちらをご利用ください。大会 2 日目は大学内のカフェテリアは営業していません。また大学周辺にお弁当屋さんとコンビニエンスストアがあるものの、レストランなどはあまりなく、短い昼食時間の中で施設が限られています。したがって、今大会では、お弁当の注文を大会 2 日目のみに限って行います。お弁当をご希望の方は、大会参加の申し込みと一緒に、ホームページからオンラインで申込み下さい。飲み物付きで 1,000 円です。
4. 懇親会の参加費用は 5,000 円です。当日参加も可能ですが（若干名）、予約の関係上できるだけ大会参加の申し込みの際に合わせて申込みください。懇親会申込みは、大会参加申込み同様に、学会ホームページからお願いします。懇親会会場は南山大学職員食堂で開催されます。名古屋めしもご提供する予定ですので、ふるってご参加ください。
5. 年次大会の受付周辺にて、書籍やジャーナルのバックナンバー等の販売を行っています。また、飲み物等の用意が参加者控室にございますのでご利用ください。
6. 会場内は禁煙です。所定の喫煙所をご利用ください。

[発表者の方へ]

1. 機器をお使いになる方は、操作等の確認を予めお願いいたします。Windows用ケーブル、プロジェクター、及びスクリーンは発表教室の全てに設置されております。今回の大会ではPCはご用意できませんので、パソコンをご持参ください。Macの利用者で、Macを持参されたい方は、ケーブルもご用意ください。また、操作については午前中の発表の方は、最初のセッションが始まる前、午後の方は昼休みにご確認ください。
2. 研究発表は、質疑応答を含めて 30 分です。時間厳守でお願いします。
3. 研究発表をなさる方は、**完成論文のコピー**を当日お持ちください（目安として 20 部程度）。必ず 1 部を受付にご提出ください。それぞれの発表会場で、各自コピーを配布してください。**プロシーディングスの原稿は完成原稿ではありません。**この点十分にご留意ください。会場には、コピーする場所はございませんので、その点もご注意ください。
4. やむを得ない事情で発表ができなくなった方は、すみやかに学術局までご連絡ください。なお、当日の緊急連絡は下の囲みの 3 つのメールアドレスに同時発信でお願いいたします。

[司会の方へ]

1. 発表開始 10 分前までに会場に入り、発表者と事前の打ち合わせを行ってください。
2. 発表開始と発表終了の時間を厳守してください。発表終了の時刻になったら、次の研究発表に移ってください。
3. 発表が取り消しとなった場合は、次の発表の前倒しをしないで、その時間帯をあけておいてください。事前に研究発表の取り消しを、学術局が把握している場合は、その旨をお伝えします。

[理事の方へ]

1. 大会前日の 6 月 12 日（金）に、南山大学 L 棟 9 階 910 会議室にて、理事会が開催されます。時間は 15：00〜17：00 です。ご参集よろしくお願い申し上げます。

事前問合せ先：
会場校担当（大会実行委員長）　　森泉　哲
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18 南山大学短期大学部
E-mail: moriizum@nanzan-u.ac.jp
発表・論文について：
学術局　吉武　正樹　E-mail: larsnunn@fukuoka-edu.ac.jp
事前問合せ(参加費等について) 及び当日問合せ先：
事務局　清宮　徹　E-mail: cajoffice@caj1971.com

[Information for Participants]

1. Please register at the registration desk upon your arrival, located in the fourth floor in the B-Building at Nanzan University.
2. The conference fee for two days is ¥4,000 (¥4,500 at the door) for members and ¥5,000 for non-members. Please pay through the on-line registration by June 5 or at the reception desk during the conference.
3. The school cafeteria will be open on Saturday, but will be closed on Sunday during the conference. There are convenience stores in neighborhood, but facilities for lunch are very limited. Boxed lunches can be purchased for Sunday, payable in advance by the on-line registration (the price is ¥1,000 per lunch; including a drink).
4. The convention dinner will be held at the Faculty and Staff Dining Hall at Nanzan University. The fee is ¥5,000, payable only in advance by the on-line registration, or at the conference desk on a first-come-first served basis (limited to about 10 people).
5. Books and back issues of CAJ journals are to be on sale and some refreshments are available near the reception desk.
6. Smoking is strictly prohibited on and around the building.

[To Presenters]

1. All rooms are equipped with PC (Windows) cables, projectors, and screens. Please bring your own computer. If you are a Mac user, you can bring it with a cable connector. You are advised to try out the equipment prior to your presentation, either before the first session starts or during lunch time.
2. The length of presentation is 30 minutes including questions and answers. Please adhere strictly to the punctual start and finish times of the presentation.
3. Presenters are requested to bring copies of their full papers on their presentation, and a copy of your paper must be submitted to the registration desk. Be aware that extended abstract included in the conference proceedings is NOT a full paper. One MUST get prepared for paper distributions (approximately 20 copies may be needed).
4. In case of cancellation of the presentation, please notify the Office of Academic Services in advance, or any accidental cancellation should be notified by an e-mail to all three addresses listed below.

[To Session Chairs]

1. Please be at the designated room 10 minutes prior to the start of the session.
2. Strictly adhere to the start and finish times of each presentation.
3. In case of cancellation, do not proceed immediately to the next presentation but leave the time slot intact. You will be notified when any accidental cancellation should happen beforehand.

[To CAJ Officers]

1. CAJ officers meeting will be held at 15:00 through 17:00 on Friday, June 12, at Nanzan University.

General Inquiry:

Satoshi Moriizumi (Program Chair)

Nanzan Junior College, 18 Yamazato-cho, Showa-ku , Nagoya, Japan 466-8673

E-mail: moriizum@nanzan-u.ac.jp

Inquiry about presentation/papers before the convention:

Director of Academic Affairs (Conference Planning) Masaki Yoshitake

E-mail: larsnunn@fukuoka-edu.ac.jp

Inquiry about fees before the convention and any inquiry during the convention:

Executive Secretary Toru Kiyomiya E-mail: cajoffice@caj1971.com

スケジュール

第1日　6月13日（土）

	A会場 （B47）	B会場（B46）	C会場 （B45）
セッション 1 10:00−11:30	学術局セッション 坂井		
支 部 会 11:40−12:10	北海道（B46），東 北（B45），関 東（B22），中 部（B44），関 西（B21），中国四国（B21），九 州（B47）		
12:10−13:00	昼　食		
セッション 2 13:00−14:30	対人関係 桜木	議論 長谷川	アイデンティティ 野中
14:40−15:40	**会場：B31** 総　会	司　会：　清宮　徹 挨拶：　五島　幸一（CAJ会長）　　中　裕史（南山大学副学長）	
15:50−16:50 17:00−18:30	**会場：B11** 学術講演 シンポジウム	林　香里（東京大学） パネリスト：林　香里　（東京大学） 青沼　智　（津田塾大学） 日高　勝之（立命館大学） 司会：五島幸一（CAJ会長、愛知淑徳大学）	
18:45−	懇 親 会	南山大学職員食堂　　（司会：大会実行委員）	

第2日　6月14日（日）

	A会場 （B22）	B会場（B47）	C会場 （B46）
セッション 3 9:00−10:30	コミュニケーション教育研究会 （パネル） 吉武	異文化 宇治谷	
セッション 4 10:40−12:10	オーラル・ヒストリー企画 丸山・宮崎	メディア 川内	
12:10−13:00	昼　食		
セッション 5 13:00−14:30	レトリック研究会 （パネル） 藤巻	地域 鳥越	
セッション 6 14:40−16:10		デジタル・メディア 宮原	伝承 伊佐

Schedule

Day I - Saturday, June 13

	Room A (B47)	Room B (B46)	Room C (B45)
Session 1 10:00–11:30	Academic Affairs Session Sakai		
Chapters 11:40–12:10	Hokkaido (B46), Tohoku (B45), Kanto (B22), Chubu (B44), Kansai (B21), Chugoku-Shikoku (B21), Kyushu (B47)		
12:10–13:00	Lunch		
Session 2 13:00–14:30	Interpersonal Relationships Sakuragi	Argumentation Hasegawa	Identity Nonaka
14:40–15:40	**Convention Hall: B31** General Assembly	MC: Toru Kiyomiya Koichi Goshima (President of CAJ) Hiroshi Naka (Vice President, Nanzan University)	
15:50–16:50 17:00–18:30	**Convention Hall: B11** Keynote Address by Kaori Hayashi (University of Tokyo) Symposium	Panelists: Kaori Hayashi (University of Tokyo) Satoru Aonuma (Tsuda College) Katsuyuki Hidaka (Ritsumeikan University) MC: Koichi Goshima (President of CAJ, Aichi Shukutoku University)	
18:45–	Convention Dinner	Nanzan University Faculty and Staff Dining Hall	

Day II - Sunday, June 14

	Room A (B22)	Room B (B47)	Room C (B46)
Session 3 9:00–10:30	Panel Session Division of Communication Education Yoshitake	Interculture Ujitani	
Session 4 10:40–12:10	Oral History of Communication Studies in Japan Maruyama/Miyazaki	Media Kawauchi	
12:10–13:00	Lunch		
Session 5 13:00–14:30	Panel Session Division of Rhetorical Studies Fujimaki	Regions Torigoe	
Session 6 14:40–16:10		Digital Media Miyahara	Folklore Isa

学　術　講　演[*1]　Keynote Address

「ジャーナリズムの危機」とコミュニケーション

林　香里

東京大学大学院情報学環　教授

ジャーナリズムは現在、危機に瀕していると言われている。理由は、さまざまだ。

第一に、デジタル技術の普及によって、新聞やテレビといった伝統的なメディア中心の制度は崩れつつある。だれでもいつでもどこからでも情報を手軽に発信できるようになり、プロフェッショナル・ジャーナリストの役割や、ニューズルーム（編集局）の機能も問い返され、そのことは、伝統的なジャーナリズムのビジネス・モデルの見直しの動きへともつながっている。

第二に、逆説的ではあるが、全員が全員に情報を発信することが可能になった一方で、社会は興味関心が細分化し、自分の身近な友人や同胞たち以外の、他者との対話が少なくなる現象がある。こうして一部の意見が過激化するポラリゼーション現象が起こっていると言われている。また、メディア産業の業績不振も、意見の極論化に拍車をかけていると言われている。米国でこの現象が議論されてきたが、日本でも全国紙が保守派とリベラルで明確に意見傾向が分かれ、対立も激しくなっている。こうした現象が指摘される一方で、近代自由主義国家では、ジャーナリズムは民主主義の砦となり、社会を統合する重要な社会制度だと考えられてきた。こうして、ジャーナリズムの危機は、民主主義の危機であると警鐘を鳴らす声も聞こえる。

この発表では、デジタル技術が普及する時代の「ジャーナリズムの危機」を概観し、その解決のキーワードは「コミュニケーション」であることを述べたい。その際、ジャーナリズムとコミュニケーションは伝統的に対抗・対立的な関係にあったことも述べつつ、現代社会において「コミュニケーション」がジャーナリズムにどのような貢献をするかについて述べていきたい。

【経歴】

林　香里（はやし・かおり）　Kaori Hayashi

1963 年名古屋市生まれ。南山大学外国語学部英米科卒業。ロイター通信東京支局記者、東京大学社会情報研究所助手、ドイツ、バンベルク大学客員研究員（フンボルト財団）を経て、現在東京大学大学院情報学環教授。専門はジャーナリズム／マスメディア研究。東京大学広報室副室長、東京大学総長補佐（2012 年）、公益財団法人東京大学新聞社理事長、ドイツ日本研究所顧問、BPO 放送倫理・番組向上機構「放送と人権等権利に関する委員会（放送人権委員会）」委員、GCN（Gender and Communication Network）共同代表、日本フンボルト協会評議員。 日本マス・コミュニケーション学会理事（2009～2013 年）、日本学術会議特任連携委員（2013 年、2014 年）。主な著書に『＜オンナ・コドモ＞のジャーナリズム―ケアの倫理とともに―』（岩波書店、2011 年、第 4 回内川芳美記念マス・コミュニケーション学会賞受賞）、『テレビ報道職のワーク・ライフ・アンバランス―13 局男女 30 人の聞き取り調査から』（谷岡理香と共編著）（大月書店、2013 年）がある。

シンポジウム[*1]　Symposium

コミュニケーションとジャーナリズム

司　　会：　五島　幸一　（愛知淑徳大学）
パネリスト：　林　香里　（東京大学）
　　青沼　智　（津田塾大学）
　　日高　勝之　（立命館大学）

私たちを取り巻く社会や直接目に見えない世界では、事故、犯罪、運動、革命、戦争などさまざまな出来事がやむことなく起こっている。これらの情報を求め人は新聞や本を読み、報道番組を視る。一方、伝える側は収集した関連資料を徹底的に読み込み、現地に足を踏み入れ、人々の声を聴き、専門家らの意見も参考にしながら、現実味のある一つの話へとまとめ上げていく。

一見すると単純な図式だが、真理や現実への探求をめぐるジャーナリズムの図式は複雑化している。人々の欲望や関心が多様化するにつれ、「現実」を一つにくくることは困難になった。また、インターネットや SNS に代表される通信技術の発展と普及は人々の感覚を拡張するとともに、情報を伝える人と受け取る人の境界を曖昧にしている。被災地の現状、原発をめぐる報道、政治とジャーナリズムの関係にみられる多くの問題は、こうしたコミュニケーションのインフラストラクチャにおける変化と人々の意識の多様化を反映しているといえよう。

本来、コミュニケーションとジャーナリズムは重なりが大きいにもかかわらず、本学会では昨今これらの関係が中心的な課題になることはなかった。本シンポジウムでは、林香里氏による基調講演の提言をもとに、複雑化するジャーナリズムの今日的課題やあり方についてコミュニケーションの観点からさらに深く切り込んでいく。

[*1]　今回の学術講演とシンポジウムは一般公開され、CAJ 会員資格や年次大会参加登録の有無を問わず、誰でも無料でご参加いただけます（事前予約不要）。

<memo>

学術局セッション

本学会ジャーナル「日本コミュニケーション研究」の未来を語りあう

司　　会：　坂井　二郎　（東京福祉大学）
話題提供者：　宮原　哲　（西南学院大学）
　　坂井　二郎　（東京福祉大学）
　　内藤伊都子　（東京福祉大学）
　　塙　幸枝　（国際基督教大学大学院）

これまで学術局セッションとして、投稿者側や査読者側の視点からいかに自分の論文をジャーナルに掲載するのかという視点でのセッションが行われてきた。今回は、ジャーナルの在り方に焦点をあてたセッションを企画した。

2014 年度から本学会のジャーナルが『日本コミュニケーション研究』へと一本化され、発行回数も年 2 回となっている。このほか、メールによる投稿により利便性が高まった他、再査読システムも導入された。しかし、この一連の改革は緒についたばかりで、まだまだ改善の余地があるように思われる。事実、会員数の割に投稿数が依然として低迷ぎみであるように見受けられる。これには様々な要因があるのであろうが、例えば有益な実践を行った研究者も投稿区分が論文や実践報告等と分けられていないことから、本学会誌への投稿に二の足を踏んでしまっているのかもしれない。

本学術セッションでは、学会の顔としてのジャーナルの質を維持しつつ、学会内外からのニーズに応えていくためには、どのような未来を描いていけるのか、学会員の皆さんと自由闊達に意見交換をしながら考えていくセッションとしたい。現在、編集委員長を務めている立場、他学会や海外学会でのジャーナルに投稿した経験のある研究者など異なった立場から話題を提供していただいた後、参加者からの思いやアイデアを語っていただくことによって、本学会のジャーナルの未来を共有し、更なる改革の方向性を探るセッションとしたい。

コミュニケーション教育研究会

ラウンドテーブルⅣ

コミュニケーション教育のモデル
―社会的コンテクストと教室的コンテクスト―

司会・話題提供：　**吉武　正樹　（福岡教育大学）**
話　題　提　供：　**五十嵐紀子　（新潟医療福祉大学）**
石橋　嘉一　（青森中央学院大学）

今年度で第 4 回目を迎えるコミュニケーション教育研究会のパネルでは、第 1 回目から第 3 回目までの議論を総括し、新たな視座を提案し、参加者とともにディスカッションを進めていきたい。

前回のパネルでは、「CAJ 的コミュニケーション観」と「社会のニーズに対応したコミュニケーション観」では相違があり、我々コミュニケーション研究者は、この二項対立（または双方にまたがる領域）について、どのように考えを整理し、教育を実践すればよいのか、という問いについて積極的に意見交換が行われた。今回のパネルでは、当議論の続編を展開する。

吉武からは、コミュニケーション教育に欠かせない 8 要素と、コミュニケーション教育のモデルを提案する。この 8 要素とは、⑴他者との対峙、⑵関係性、⑶動態性、⑷認識過程における意味付与と枠組みの再生産・刷新、⑸言語：内言・外言、⑹経験・体験、⑺感覚、⑻自己との対峙、である。次に、上記をもとに、コミュニケーション教育のモデル図を提案する。このモデルの特徴は、横軸に「社会的コンテクスト」と「教室的コンテクスト」に大別された学習環境軸と、縦軸に「脳・思考レベル」（知識や概念）と、「身体・体験レベル」（実習や協同的活動）の学習成果軸を体系的に整理し、可視化を試行した。また、学習者の成長を説明する理論的背景に、ヴィゴツキーの最近接発達領域の概念を援用し、コミュニケーション教育における知識の教授と、社会的な実体験で得られる学習成果を包括的にまとめた。これらの新たな視座をもとに五十嵐と石橋からは、今回、教育実践における評価に関する話題を提供し、コミュニケーション教育の体系的な整理とさらなる問題提起を試みる。

今回のパネルでは、コミュニケーション教育とはそもそも何を目指し、どのような教育であるのか、という大きな枠組みの探求を踏襲しつつも、あえてチャレンジングな視座を共有することで、今後の教育と研究、双方の発展を参加者の皆様とともに目指していきたい。

パネル企画（レトリック研究会）

レトリックにとってのジャーナリズム―関係性の多元化に向けて―

報告者： 是澤 克哉 （獨協大学）
Kaori Miyawaki (University of Wisconsin-Milwaukee)
田島 慎朗 （神田外語大学）
応答者： 花木 亨 （南山大学）
司 会： 藤巻 光浩 （静岡県立大学）

ジャーナリズムがマスメディアの発展とともにあったという歴史的経緯から、コミュニケーションならびにレトリック研究は、しばしばジャーナリズムをヘゲモニーを行き渡らせる手段、権力の媒介物、あるいは統治のための技術として理解してきた。また、「第四の権力」と呼ばれる健全なジャーナリズムがそうであるように、我々はジャーナリズムをそうした権威や権力に対する風刺・批判・抵抗の手段として認識してきた。

このような枠組みのもとでは、ジャーナリズムは自らの目的を達成するためのテキストを拾い出す情報源として一面／一元的にしか理解されない。そこで、今回レトリック研究会ではジャーナリズムをより多元的に理解する為に、報道テキストが生成される過程やその効果を多角的に検証することを目的とする。

是澤は、普天間基地の辺野古移設問題における全国紙の報道を中心に、沖縄の「犠牲」がどのように本土の国民に報道され受容されたかを中心に分析することで、その構造の明確化を試みる。特に(1)米兵による少女強姦事件（1995）、(2)沖縄国際大学米軍ヘリ墜落事件（2004）、(3)民主党鳩山政権による「最低でも県外」発言（2009）、(4)沖縄知事選挙と衆議院選挙（2014）の四点をとりあげ分析する。

Miyawaki はフランスの風刺新聞 Charile Hebdo に掲載された風刺画を発端とした襲撃事件を題材に、Charlie Hebdo（と自由主義国家）の主張する「表現の自由」を考察する。特に(1)Telegraph 紙に掲載された風刺漫画家 Luz のインタビューと、(2)NBC による Charlie Hebdo の編集者 Gerard Biard のインタビューを取り上げる。

田島は現在朝日新聞社による戦後の暴力排除・民主化プレスキャンペーンの成功例として伝えられる本庄事件（1948）を題材に取り上げる。彼らが論じた＜民主化＞はどのような価値をもち、どの程度当時の本庄町民に浸透したのかを、主体（subject）-民衆（demos）をキーワードに探る。

企画理事＆学術局企画

日本におけるコミュニケーション学のオーラル・ヒストリー

コーディネーター：　**丸山　真純　（長崎大学）**
宮崎　新　（名古屋外国語大学）

本学会年次大会も 45 回を迎え、あと 5 年で半世紀となる。日本のコミュニケーション学の先駆者として学界をリードしてきた研究者もすでに退職を迎えてきている年代になってきている。これまでのコミュニケーション学の来た道や歴史を振り返り、記録していくことは、今後のコミュニケーション学の発展を考えるには重要なことであろう。これまで、散発的に日本のコミュニケーション学のパイオニアに対して本学会でも特別セッションやジャーナルにその記録を残してきてはいるが、より大規模なプロジェクトとしては実施してこなかった。

過去の歴史は当時のニュースレターや学会誌などの文献調査をすればわかることも多い。しかし、時には労苦を重ね、時には新しい知見が得られた喜びを胸に秘め、これまでコミュニケーション学に長年にわたり貢献をされてきた当事者としての、まだ文字化はされていないオーラル・ヒストリーを記録しすることは、半世紀近く歴史を刻んできたこの時期にきたからこそ重要であると考えられる。学会としては、その歴史を記録に残していくことで、学の歴史をたどることができるであろうし、若手研究者からすれば、先輩研究者の道を共有できることによって、今後の研究への大きな示唆を得ることができよう。

6 月 13 日（土）　Saturday, June 13　11:40-12:10 @ B 棟

支部会議　Chapter Meetings

各支部でミーティングを行います。部屋割りについてはスケジュール表をお確かめ下さい。
Chapter meetings will be held in the assigned rooms, as listed on the schedule of events.

6 月 13 日（土）　Saturday, June 13　14:40-15:40 @ B31 (B 棟 3F) : Building B 3F

総　会　General Assembly

司　会：　清宮　徹　（西南学院大学・日本コミュニケーション学会　事務局長）

開会の辞：五島　幸一　（愛知淑徳大学・日本コミュニケーション学会　会長）

挨　拶：　中　裕史　（南山大学副学長）

6 月 13 日（土）　Saturday, June 13　18:45 -　@ 南山大学職員食堂

懇親会　Conference Dinner　：　南山大学職員食堂

司会：　藤巻　光浩　（静岡県立大学　大会実行委員会委員、中部支部　支部長）
名古屋めしを食しながら、多くの皆様と交流を図りたいと思います。懇親会は 18:45 に開始したいと思います。懇親会場は、大会会場からグリーンエリア（芝生広場）を抜け、徒歩 3 分ほどの南山大学職員食堂です。皆さまのご参加をお待ちしております。
会費 5000 円、大会申込みの際、同時に申込み下さい。　＊当日申し込みは、13 日午前中までに（先着 10 名程度）。

書籍・教育機材の展示

受付となりの B43 教室にて、各種の展示を行っています。ご自由にご覧ください。
A variety of educational materials are to be displayed at B43.

◆　宿泊のご案内
航空チケットの手配を含め、ホテルのご紹介と手配については、大会運営をお手伝いいただいているトップツアー様にお願いしています。年次大会の申込みホームページからお申込みできます。

◆　昼食のご案内
土曜日は大学内の食堂をご利用いただけますが、日曜日は食堂がお休みです。日曜日のお弁当をご希望の方は、オンライン申込みのサイトから、大会申し込み時にご一緒に申し込み下さい。

6月13日（土）　Saturday, June 13

受付　9:00～　**Registration commencing at 9:00**

時間	会場	プログラム　Session
10:00 ｜ 11:30	A会場 (B47)	**＜セッション 1＞** **学術局セッション**　**Academic Affairs Session** 本学会ジャーナル「日本コミュニケーション研究」の未来を語りあう 宮原　哲　（西南学院大学） 坂井　二郎　（東京福祉大学） 内藤　伊都子　（東京福祉大学） 塙　幸枝　（国際基督教大学大学院）
11:40 ｜ 12:10	B46 B45 B22 B44 B21 B21 B47	**支部会議**　**Regional Chapter Meetings** 北海道支部　**Hokkaido** 東北支部　**Tohoku** 関東支部　**Kanto** 中部支部　**Chubu** 関西支部　**Kansai** 中国四国支部　**Chugoku & Shikoku** 九州支部　**Kyushu**
12:10 ｜ 13:00		**昼　食**　**Lunch**
13:00 ｜ 14:30	A会場 (B47)	**＜セッション 2＞** **対人関係**　**Interpersonal Relationships** 司会：Toshiyuki Sakuragi　(Gustavus Adolphus College) 1.　日本人初対面二者間会話における重複発話―異ジャンル間比較を通した協調性の一考察― 竹田　らら　（東京電機大学） 2.　夫婦関係の満足度測定尺度の作成の試み―尺度の信頼性と妥当性の検討― 佐々木　研一　（株式会社イノベーションゲート） 伊東　祐輔　（株式会社パートナーエージェント） 木下　陽介　（株式会社博報堂） 宮原　哲　（西南学院大学） 3.　Two Standpoints: Interviewing American and Japanese mid-level managers of Japanese-owned manufacturers in the US Sachiyo M. Shearman（East Carolina University） Kumi Ishii（Western Kentucky University）
	B会場 (B46)	**議論**　**Argumentation** 司会：長谷川　聡　（北海道医療大学） 1.　スタイルの研究―マデリン・オルブライトの演説― 山上　登美子　（日本大学） 2.　弁明効果の日米比較―弁明受諾方略に焦点を当てて― 島田　拓司　（天理大学） Carl L. Thameling（University of Louisiana at Monroe） Joseph Scudder（Northern Illinois University） 3.　議論の構造的差異を説明する新たなモデル―オンライン・コミュニケーションの場合― 鈴木　志のぶ　（北海道大学）

時間	会場	プログラム　Session
13:00 ｜ 14:30	C会場 (B45)	**アイデンティティ　Identity** 司会：野中　昭彦　（中村学園大学） 1.　在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティ 仲里　和花　（沖縄キリスト教短期大学） 2.　沖縄本島在住のアメリカ人と沖縄人（日本人）の親をもつ人々の言語選択と使用を通してのアイデンティティ形成 石川　直美　（琉球大学大学院）
14:40 ｜ 15:40	B31	**総会　General Assembly** 司　　会：　清宮　徹　（西南学院大学） 開会の辞：　五島　幸一　（愛知淑徳大学・日本コミュニケーション学会　会長） 挨　　拶：　中　裕史　（南山大学副学長）
15:50 ｜ 16:50	B11	**学術講演　Keynote Address** **「ジャーナリズムの危機」とコミュニケーション** 林　香里　（東京大学）
17:00 ｜ 18:30	B11	**シンポジウム　Symposium** **コミュニケーションとジャーナリズム** 司　会：　五島　幸一（愛知淑徳大学） パネリスト：　林　香里　（東京大学） 青沼　智　（津田塾大学） 日高　勝之（立命館大学）
18:45 ｜	南山大学 職員食堂	**懇親会　Convention Dinner** 司会：　藤巻光浩　（静岡県立大学　大会実行委員会委員、中部支部　支部長） 名古屋めしを食しながら、多くの皆様と交流を図りたいと思います。懇親会は 18:45 に開始したいと思います。懇親会場は、大会会場からグリーンエリア(芝生広場)を抜け、徒歩 3 分ほどの南山大学職員食堂です。皆さまのご参加をお待ちしております。 会費 5000 円、大会申込みの際、同時に申込み下さい。　＊当日申し込みは、13 日午前中までに（先着 10 名程度）。

6 月 14 日（日）　Sunday, June 14

受付　8:30～　Registration commencing at 8:30

時間	教室	プログラム Session
9:00 ｜ 10:30		＜セッション 3＞
	A会場 (B22)	パネル　コミュニケーション教育研究会　Division of Communication Education 司会：　吉武　正樹　（福岡教育大学） 話題提供：　五十嵐　紀子（新潟医療福祉大学） 石橋　嘉一　（青森中央学院大学）
	B会場 (B47)	異文化　Cultures 司会：宇治谷　映子（名古屋外国語大学） 1. A New Framework: Assessing Acculturation Dynamics and Outcomes in Japan Adam Komisarof（Reitaku University） 2. コミュニケーション学における LGBT 研究の現状と課題にかんする一考察 師岡　淳也　（立教大学） 3. “Japanese only”: the Impact of Japanese Ethnocentrism on Preferences in Gay Online Dating Flavien Puel（Seinan Gakuin University） Lenin Gonzalez（Seinan Gakuin University） Akira Miyahara（Seinan Gakuin University）
10:40 ｜ 12:10		＜セッション 4＞
	A会場 (B22)	オーラルヒストリー企画　Oral History of Communication Studies in Japan 日本におけるコミュニケーション学のオーラル・ヒストリー コーディネーター：　丸山　真純　（長崎大学） 宮崎　新　（名古屋外国語大学）
	B会場 (B47)	メ デ ィ ア　Media 司会：川内　規会　（青森県立保健大学） 1. The Use of Media to Promote Child Restraint Seat Use in Japan Mellisa Ogasawara　（Aomori University of Health and Welfare） Atsuko Chiba　（Aomori University of Health and Welfare） Kie Kawauchi　（Aomori University of Health and Welfare） Mariko Hasegawa　（Aomori University of Health and Welfare） 2. 情報アクセシビリティの観点からみる「共生」―聴覚障害者のためのお笑いの字幕化をめぐって― 塙　幸枝（国際基督教大学大学院） 3. テレビの吹き替えが形成する外国人に対する固定観念 野中　昭彦（中村学園大学）
12:10 ｜ 13:00		昼食　Lunch

時間	教室	プログラム Session
13:00 ｜ 14:30	Ａ会場 (B22)	＜セッション 5＞ パネル　レトリック研究会　Division of Rhetorical Studies レトリックにとってのジャーナリズム —関係性の多元化に向けて— 司会:　藤巻　光浩（静岡県立大学） 報告者: 是澤　克哉（獨協大学） Kaori Miyawaki　(University of Wisconsin-Milwaukee) 田島　慎朗（神田外語大学） 応答者: 花木　亨　（南山大学）
	Ｂ会場 (B47)	地域　Regions 司会：鳥越　千絵　（西南学院大学） 1.　共同制作現場における「遊び」のコミュニケーション　—三宅高校ファッションショーを事例として— 大西　未希（東京大学） 2.　「まちづくり」における合意形成のコミュニケーション研究—合意形成における地域の歴史活用を中心に— 久保　健治 3.　神楽とコミュニケーション—鷲宮催馬楽神楽保存会のフィールドワークから— 櫻井　拓也（東京電機大学）
14:40 ｜ 16:10	Ｂ会場 (B47)	＜セッション 6＞ デジタルメディア　Digital Media 司会：宮原　哲　（西南学院大学） 1.　企業が大学新卒者に求めるコミュニケーション能力—ウェブサイトの「求める人材像」分析を通して— 野島　晃子（立命館大学大学院） 2.　Circulation of Affects in Digital Culture: - A Case of the Japanese Hostage Crisis in 2015- Naoki Kambe（Rikkyo University） 3.　地元の新聞は奄美群島をどのように語っていたのか？—奄美群島の終戦・復帰運動のメディア史— 小西　卓三（昭和女子大学）
	Ｃ会場 (B46)	伝承　Folklore 司会：　伊佐　雅子　（沖縄キリスト教学院大学） 1.　次世代の語りに求められるもの—水俣病を伝える事例を通して考える— 池田　理知子（国際基督教大学） 2.　「介護の魅力」についての一考察　—他者の物語を共有する営みについて— 五十嵐　紀子（新潟医療福祉大学）

発表要旨

6 月 13 日（土）　Saturday, June 13　13:00-14:30　Session 2

A 会場（B47）	**研究発表**	**対人関係**
Room A	**Presentation**	**Interpersonal Relationships**

日本人初対面二者間会話における重複発話
－異ジャンル間比較を通した協調性の一考察－

竹田　らら（東京電機大学）

本発表では、日本語話者同士で同一参与者を含む複数ジャンルの会話での重複発話に着目する。そして、メタコミュニケーションの観点から、ジャンルの違いや心的距離の大きさが重複発話と協調性の関係にどう影響するかについて、頻度と機能の面で解明を試みる。そして、ジャンルが、疎・上下という心的距離よりも機能の違いに大きく影響するとの仮説を掲げる。データは、女性同士の対話を実験的な設定で収録した「ミスター・オー・コーパス」より、日本語話者同士 11 組の初対面の大学教員と大学生による自由会話と課題達成談話での録画資料と書き起こし資料である。このうち、自由会話では「びっくりしたこと」をテーマに 5 分以内で会話をしてもらい、課題達成談話では絵本から 15 枚の絵を拾って作成したカードを並べ替え、時間制限無しでひと続きの物語を組み立ててもらった。

分析の結果、自由会話で課題達成談話よりもターンあたりの重複発話の総数が多かった。さらに、自由会話であいづちを伴う重複発話が、課題達成談話であいづちを伴わない重複発話や同一表現による重複発話がより多く見られた。次に、重複発話の機能的特徴として、自由会話では、教員が会話の進行を促したり学生が同調したりする時にあいづちを伴う重複発話が頻繁に用いられ、相手の話を軌道に乗せて先に進ませる手助けになっていた。同時に、相手に話題を振ったり自分が話す内容を考えたりする重複発話が見られ、沈黙を減らすのに貢献していた。一方、課題達成談話では、教員主導で話題が展開していくところに学生が視点を提供する形が取られ、あいづちを伴わずにカードへの意見を重複させて物語の完成を促したり、同一表現や見解に関する重複発話で内容の共通性を示したりする手助けになっていた。

以上を念頭に、自由会話での協調性は参与者間の関係性を高めて話を円滑に進める性質を、課題達成談話での協調性は命題を創出する性質を持つことを述べる。

夫婦関係の満足度測定尺度の作成の試み
－尺度の信頼性と妥当性の検討－

佐々木　研一（株式会社イノベーションゲート）
伊東　祐輔（株式会社パートナーエージェント）
木下　陽介（株式会社博報堂）
宮原　哲（西南学院大学）

夫婦関係の満足度を高めることは少子化対策として重要なことが指摘されている。先行研究から、夫婦関

係の満足度の要因として、夫婦間のコミュニケーションが大きな影響を与えていることが明らかになっており、夫婦間で良好なコミュニケーションが確立、維持できていると夫婦関係の満足度が高い、という仮説が立てられる。また、近年、夫婦のあり方が変わってきており、これまで多くの尺度が開発されているが、新しい夫婦の関係とコミュニケーションの側面の両方を考慮した夫婦関係の満足度を測定することができない。

そのため、本研究では、「良好な」コミュニケーションを取る為に必要なコミュニケーション・コンピテンスと新しい夫婦関係の概念をベースとした満足度測定尺度（QOM）の作成を試みた。その結果、実際の夫婦生活の満足度と QOM の結果が有意な結果になることを確認し、高い基準連関妥当性が得られた。次に、因子分析の結果、6 因子が抽出された。それぞれの因子は、「自己 PR 力」、「観察力」、「ケンカ力」、「仲良し力」、「過去未来力」、「境界力」と命名された。尺度の信頼性は、α係数によって検討され、いずれも高い信頼性係数が得られた。

Two Standpoints:

Interviewing American and Japanese mid-level managers of Japanese-owned manufacturers in the US

Sachiyo M. Shearman (East Carolina University)
Kumi Ishii (Western Kentucky University)

It has been well documented that Japanese and American workers hold different cultural value orientations, which is manifested in various behaviors and communication practices in the workplace (e.g., Hofstede, 2001; Hofstede & Hofstede, 2005). This divergent cultural value orientations and communication styles can cause various challenges to the workers in multinational corporations (MNCs) both Japanese sojourners and expatriates and American local workers. As Japanese-owned manufacturer in the United States forms a unique cultural environment, both American and Japanese employees need to work through the cultural differences and achieve the common goal of smooth and efficient operations (Shibata, 1999; Yamazaki & Kayes, 2007). Specifically, this study examined the mid-level managers - both Japanese and American workers, who deal with two divergent cultures on a daily basis. Series of in-depth interviews were undertaken as part of a larger study. Five mid-level American managers and five Japanese managers are interviewed. Depending on interviewee's preferences, interviews were conducted face to face or via emails. All face to face interviews were audio recorded with permission of the interviewees and transcribed. Applying Standpoint Epistemology as a framework (Harding, 1991; Wood, 1992), narratives of communication challenges provided by Japanese and American mid-level employees were analyzed. A thematic analysis was used to analyze the transcribed interview data. The current study documented various challenges (e.g., language barrier, translation challenges, communication preferences, cultural value differences manifested in work-life balance/priority, openness, approachability, recognition and evaluation) that Japanese and American mid-level managers faces and possible ways that they work out those challenges. Implications are discussed in light of a unique organizational sub-culture in a subsidiary, which is merging two cultural values and standpoints in MNOs.

B 会場（B46） Room B	研究発表 Presentation	議論 Argumentation

スタイルの研究
ーマデリン・オルブライトの演説ー

山上　登美子（日本大学）

本研究の目的は、1998 年 12 月 1 日にオルブライト米国国務長官が行ったワシントン会議の基調演説を取り上げ、演説の背景とスタイルを明らかにすることである。演説の背景については、会議の概要と話し手の家族の歴史との関連を調べる。演説のスタイルについては、語句の選び方や文章構造を分析する。分析の結果、以下の点が明らかになった。

1)　ワシントン会議の目的はナチスに財産を奪われた人々への賠償で、話し手の家族も含まれていた。
2)　代名詞“we”の使用回数が最も多く、聴衆との触れ合いを求める話し手の姿勢が示されていた。
3)　代名詞“I”の使用回数が次に多く、話し手の過去の経験が語られていた。
4)　1 人称代名詞が多く使われているので、聴衆に共感を求める話し手の姿勢がうかがわれた。
5)　総称語が多く使われ、複数の概念が強調されているので説得力が高められていた。
6)　理念の関連語が最も多かったので、倫理性の高い国際会議であることが伝えられていた。
7)　文の種類が多く、変化に富み、理解しやすい内容であった。
8)　文の長さに多様性があり、平均すると標準的な長さであった。
9)　意味上の区切りがはっきりしており、文章構造は理解しやすくなっていた。
10)　さまざまな技巧によって、話し手の考えが強調されていた。

この演説は状況にふさわしく、言葉に無駄がなく、内容は正確で、明確に伝えられており、話し手の主張は印象的であった。今回の研究により、この演説には Barker が指摘した、目標にすべきスタイルの要素が十分に含まれていることがわかった。

弁明効果の日米比較
ー弁明受諾方略に焦点を当ててー

島田　拓司（天理大学）
Carl L. Thameling (University of Louisiana at Monroe)
Joseph Scudder (Northern Illinois University)

本研究の目的は、加害者が行う弁明が被害者にどの程度影響するのか、その弁明効果についての日米文化差を、被害者の評価とコミュニケーション行動（フィードバック）の２点から明らかにすることであった。本研究では、被害者の視点から、謝罪・弁解・正当化という弁明方略の効果を、被害者の状況認識（問題の重大性、行為の悪質性、結果責任、寛容性）に与える影響、弁明方略に対する評価、許すというメッセージをフィードバックするコミュニケーション方略（弁明受諾方略）を通して検討した。調査対象は、日本人学生 254 名と米国人学生 371 名で、質問紙による場面想定法（一部はオンライン・アンケート・システム）でデータを収集した。分析の結果、日本人は米国人よりも弁明行為に至った問題状況をより深刻に捉えており、特に、行為の悪

質性と結果責任については有意差があり、中程度の効果量が確認された。また、弁明方略の効果については、米国人は日本人に比べて正当化を高く評価することを示唆したが、日本人の方が米国人よりも謝罪を高く評価するという仮説は支持されなかった。さらに、弁明受諾方略については、予測どおり、日本人は米国人よりも「条件付き容認」を選好し、米国人は「話し合い」を選好する傾向を示した。結果は、厳格な文化－寛容な文化や個人主義－集団主義の次元から考察した。そのなかで、個人主義的な寛容性は、情意的許し（否定的な許せないという感情を肯定的な他者志向の感情に変える内的体験）であるのにたいし、集団主義的な寛容性は、裁定的許し（感情的には許せないが、報復したり、相手を避けたりしないという行動的意図を変える決断）であるという質的違いの影響、日本人が謝罪を評価しなかった理由については、謝罪の質的違いの可能性を指摘した。

議論の構造的差異を説明する新たなモデル
－オンライン・コミュニケーションの場合－

鈴木　志のぶ（北海道大学）

議論は日常でも重要かつ一般的な行為であることから、議論に関する多くの先行研究が行われて来た。本研究の目的は人々が行う議論の構造に影響を与える要因を検証することである。この課題に関する先行研究のうち、Suzuki（2011）は、攻撃的コミュニケーション行動理論に基づき、個人が持つ「議論を肯定的に捉える特質」と「問題への関心」という二つの要因を取り上げ、それらが、個人の構築する議論の構造（複雑–簡潔・直接的–間接的）に影響を与えることを示した。しかし、それら二つの要因は議論の構造をごく一部を説明するにとどまっている。そこで本研究では従来のモデルを発展させ、上記二要因に「自己の信念の強さ」と「議論の質を見分ける能力」という二つの要因を加え、議論の構造的差異をより良く説明できるかどうかを検証する。

本研究ではオンラインで相互作用的な議論に近い状況を作り、調査を実施した。参加者は日本人大学生 200 名である。調査では「日本において死刑制度を存続すべきである。」という意見を提示、それに対する参加者の考えとその問題に対する関心の程度を尋ねた。次に複数の架空の参加者による質の異なる議論が提示され、最後に参加者本人がこの問題について、自分の意見を記述して終了した。

参加者の記述した議論は質の評価のため、先行研究の方式に従ってコーディングされた。データは重回帰分析された。従属変数は個人の記述した議論の質であり、独立変数は（a）議論を肯定的に捉える特質、(b）問題への関心、(c）自己の信念の強さ、そして（d）議論の質を見分ける能力、であった。分析の結果、(a)と（b）の効果に関しては先行研究の結果が再現され、(c）と（d）の効果も有意と認められた。拡張された新しいモデルは従来のモデルの説明率を大きく上回った。このように本研究は、議論の構造的差異を生む仕組みをより詳細に示すことができた。本研究の理論的意義についても考察した。

C 会場（B45）	**研究発表**	**アイデンティティ**
Room C	**Presentation**	**Identity**

在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティ

仲里　和花（沖縄キリスト教短期大学）

グローバル化の時代を迎え、外国人との接触機会が増えたことにより、日本においても国際結婚件数は年々増加傾向にある。その中でも、フィリピン人妻・日本人夫の結婚件数は 2006 年最多となり、2013 年には中国人国籍妻に次いで 2 番目に多い。沖縄県ではフィリピン人の数は在沖外国人総数の 16%を占める。

筆者は在沖フィリピン人女性が抱えるコミュニケーションの問題に関心を持ち調査研究を続けている。在沖フィリピン人女性は、言葉や文化の壁にぶつかりながらも沖縄人男性と結婚し出産・育児を経験し就労しながら沖縄社会に適応していた。彼女達は状況に応じて、日本語、英語、タガログ語、地方語の複数言語を使いこなし、妻、嫁、母親、就労者として様々な顔を持つ。本稿の目的は、在沖フィリピン人女性が自分の培ってきた複数言語にどのような意識を持ちその意識が彼女達のアイデンティティにどのような影響を与えているのかを考察することである。

本調査では県出身男性と結婚したフィリピン人女性 6 人を対象にインタビューを行った。インタビューでは彼女達の言語使用と言語意識に関して質問した。

その結果、在沖フィリピン人女性は、それぞれの場面において異なる言語を使用し、その言語の使い分けによって 4 種類のアイデンティティを持つ傾向があることがわかった。家庭や学校では「①日本人の妻・母親として」、職場では「②複数言語を使う就労者として」、教会／フィリピン・コミュニティーでは「③フィリピン人タガログ民族／④ヴィサヤ民族として」のアイデンティティを表出すると同時に、複数言語を使い分けることによってこれらのアイデンティティを確認・確立していた。本稿では、フィリピン人女性が家庭、職場、教会、学校で使う言語、その言語意識、その意識が彼女達のアイデンティティに与える影響について考察を深めていく。

沖縄本島在住のアメリカ人と沖縄人（日本人）の親をもつ人々の言語選択と使用を通してのアイデンティティ形成

石川　直美（琉球大学大学院）

沖縄県の本島では、米軍基地の存在もあり、現在でもアメリカ人男性と沖縄人（日本人）女性の間に生まれる子どもが多い。野入（2010）は、沖縄県では、毎年、およそ 250 人から 300 人のアメリカ父親と日本人母親をもつ子どもが出生していると報告している。沖縄県では、沖縄戦時、1945 年に沖縄に米軍人が上陸して以来、多くの沖縄人（日本人）女性が強制的に、または合意のうえで、アメリカ軍兵士と接触し、子どもを生んでいる。波平（1970）は、混血児問題は他のマイノリティグループと共通する面もあるが、他方、独自の問題状況を内包している、と述べている。それは、ひとり親育ち（父親不在）がほとんどであり、ときには両親不在であるケースがある。このことは、当時の時代背景だと認識しなくてはならない。彼・彼女らが生活していく上で言語、アイデンティティ、コミュニケーションの問題が存在している場合が多く、とりわけ、言語とアイデ

ンティティの問題は重要であると思われる。

本研究では、沖縄本島在住のアメリカ人と日本人の親をもつ人々が、どのような環境の中で、どのように言語を選択・使用し、言語を通してどのような経験をしたのか、言語とアイデンティティ形成がどのようにかかわっているのかを考察する。

本調査は、2013 年 9 月から 2014 年 9 月にかけて実施した。昨年の CAJ 年次大会での発表ではサンプルが少なかったが、今回の対象者は、沖縄本島在住のアメリカ人と日本人の親をもつ人々20 人（男性 11 人、女性 9 人）である。沖縄語を話せる人にとっては、言語とアイデンティティが密接に関わる傾向があり、自身の話すことばと所属感の一致がみられる傾向があった。彼・彼女らにとって、日本語、英語、沖縄語の三言語習得は、主体的に自分を決めるための重要な要素でもあると言えよう。

B 会場（B47）	**研究発表**	**異文化**
Room B	**Presentation**	**Interculture**

A New Framework: Assessing Acculturation Dynamics and Outcomes in Japan

Adam Komisarof (Reitaku University)

The goal of this presentation is to report on the development of a new framework, based upon data gathered in Japan, for characterizing acculturation dynamics, their inherent acculturation strategy alignments, and their consequent acculturation outcomes. Prominent acculturation frameworks such as John Berry's work on acculturation attitudes and Bourhis et al.'s Interactive Acculturation Model have utility in addressing Japan-based acculturation, but diverging schema found among many subjects in Japan for constructing the meaning and outcomes of their acculturation processes necessitate more explicit, intentional treatment than Berry or Bourhis et al. provide.

This new framework addresses two key acculturation issues: 1. "When interacting with cultural outgroup coworkers, does the subject perceive these coworkers to be categorizing him as culturally similar or different from themselves?" and 2. "Does the individual perceive herself as a core member of her work organization?" Considering these issues simultaneously results in four acculturation profiles: *Marginalized Outsider, Alien*, *Assimilated Member*, and *Integrated Member*.

Question #1 is posed to discern whether or not one is seen by his outgroup as culturally similar enough to be a provisional member of their national ingroup. This is not a question of citizenship, but rather, the issue is whether the acculturator is viewed as someone who is or can potentially become a functioning group member through his mastery of the outgroup's cultural and linguistic competencies. For question #2, it is of primary interest whether cultural outgroup members accept the acculturator in her work organization as a member who can competently enact essential work-related roles.

The four basic acculturation profiles in this model will be explained in detail. Future research directions will also be outlined so that the framework may ultimately be utilized not only with Japan-based acculturating groups, but also those undergoing acculturation in other national cultures.

コミュニケーション学における LGBT 研究の現状と課題にかんする一考察

師岡　淳也（立教大学）

本論文では、米国のコミュニケーション学におけるLGBT（Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender）研究の歴史的展開と最近の動向を追いながら、日本における性的マイノリティにかんするコミュニケーション研究の現状と課題について論じることにしたい。米国のコミュニケーション学でLGBTをテーマにした論文や書籍が定期的に刊行されるようになるのはクィア理論が台頭する90年代以降のことである。その後、コミュニケーション学におけるLGBT研究は大きく進展するとともに、その裾野も広がり、現在では性的指向の問題が標準的なコミュニケーションの教科書で取り上げられるなど、LGBT研究はコミュニケーション学の主要分野の１つとして

認知されている。

一方、日本のコミュニケーション学において性自認や性的指向の問題に対する関心は依然として低い。日本コミュニケーション学会の学会誌や日本コミュニケーション研究者会議のProceedingsにはLGBTを主題とした論文はこれまで掲載されていないし、同様の「沈黙」は異文化コミュニケーション学会、日本マス・コミュニケーション学会、多文化関係学会の学会誌・紀要にも概ね当てはまる。日本と米国では性的マイノリティを取り巻く社会的状況やコミュニケーション学のアカデミアにおける立ち位置も異なるため、安易な比較は慎むべきだが、それでもいくつかの課題をあげることができる。その１つは、コミュニケーション教育や教育コミュニケーション（instructional communication）の文脈において性的マイノリティが直面する困難に対する関心を高めることである。コミュニケーション研究者は研究成果の発表や政策提言を通して、より性的に多様で包摂的な教室内のコミュニケーション環境をつくることに寄与することができるが、そのためにはより多くの研究者がLGBTの問題に関心をもち、関与することが不可欠である。

"Japanese only": The Impact of Japanese Ethnocentrism on Preferences in Gay Online Dating

Flavien Puel (Seinan Gakuin University)
Lenin Gonzalez (Seinan Gakuin University)
Akira Miyahara (Seinan Gakuin University)

To this day, an extensive collection of research proves that Japan is an ethnocentric civilization, drawing a strong line between what and who is 外 and内. Many Japanese people assume that 外人simply cannot comprehend the Japanese culture, and therefore are hard to assimilate (Condon, 1984, Itoh, 1996).

Technology nowadays helps people overcome social awkwardness, as conversation through screens is easier. Referenced by Suler as *online disinhibition effect*, this tendency is all the more striking in Japan, as offline society works on rigid social systems, such as 本音and 建前. However, this sudden freedom might cause quite the extreme reaction.

This study will cross references between these trends and an emerging platform, gay online dating. In a country where the LGBTQ community can be as secluded as it sometimes is in Japan, online dating has been a revolution for the community. Smartphone applications such as Grindr, Jack'd or 9monsters have enjoyed a fast, constant fame since their launch. Yet studies conducted in the West have shown the rise of flaws, as dissociative anonymity seems to allow users to use derogatory terminology to design people's ethnicity, such as "rice", or "curry", and use those terms as their potential partners' selection; for instance: "no rice", "White only". Is it the same in Japan? The knowledge inferred from the literature review will be assessed by a series of interview of aforementioned applications users.

B 会場（B47）	**研究発表**	**メディア**
Room B	**Presentation**	**Media**

The Use of Media to Promote Child Restraint Seat Use in Japan

Mellisa Ogasawara (Aomori University of Health and Welfare)
Atsuko Chiba (Aomori University of Health and Welfare)
Kie Kawauchi (Aomori University of Health and Welfare)
Mariko Hasegawa (Aomori University of Health and Welfare)

Since April 2000, the law in Japan has required that children under the age of 6 years be restrained in a child restraint seat (CRS). The introduction of compulsory CRSs resulted in an increase in use from approximately 8% in 1998 to 60% in 2000. However, despite annual road safety campaigns, the rate of use in 2014 was still only 61.9%1). On the other hand, CRS use rates in many developed countries, such as Australia, the U.K and Sweden, are over 90%. The low level of use in Japan is a serious concern, and it raises questions about the methods used to increase public awareness about the risks associated with the non-use of CRSs.

Theories and application for health promotion in Japan suggest that a 'positive approach', which pursues the issue in terms of the benefits the person will get from discontinuing the behavior, is most effective. In contrast, it has been standard practice for decades overseas to use a 'negative approach', which highlights the dangers or disadvantages of continuing the behavior. Thus, health promotion in Japan tends to use language and images that have positive nuances, whereas, overseas, fear-based, hard-hitting campaigns are common. A further difference in the promotion of CRSs lies with news coverage of accidents. Reporting of accidents abroad in which children are injured or killed focuses heavily on the failure to use CRSs. However, Japanese news coverage often neglects to present this aspect of accidents.

With only a 1.6% increase in the use of CRSs over the past 14 years, Japan needs to rethink how the message is being communicated. In order to increase use, in-depth research is needed to establish what messages and images would be more effective in changing the Japanese public's behavior and attitudes towards the use of child restraint seats.

情報アクセシビリティの観点からみる「共生」
－聴覚障害者のためのお笑いの字幕化をめぐって－

塙　幸枝（国際基督教大学大学院）

現代社会において「共生」という言葉は、耳触りのよい、ポジティブな意味合いをもつものして、さまざまな文脈のなかで使用されている。とりわけ、「障害者との共生」や「共に生きる社会」といった文言は、共生をしばしば障害者福祉との関連において位置づけ、相互理解のメッセージを強調するものであることも多い。だが、その「共生」という言葉の実際の用例を精査してみると、それは一方では、差異をありのままに受け入れようという異化的（非同化的）な指向性をそなえると同時に、他方では、差異や多様性を抑圧することによっ

て社会の同一性を維持しようとする同化的な指向性をそなえるものとして理解しうる。

本研究では、上述した「共生」の意味を探るために、それを支える理念の１つである「アクセシビリティ」の問題を取りあげる。とくにここでは、視覚メディアにおける聴覚障害者（ろう者、難聴者、中途失聴者を含む）の情報アクセシビリティに着眼し、娯楽や芸術の領域における字幕化（音声情報から視覚情報への変換）をめぐる状況を考察する。なかでも、共有性を前提とする「お笑い」のような事象へのアクセシビリティを分析の対象とすることで、それが技術的側面（たとえば、字幕技術や編集技術による翻訳の制約）／内容的側面（たとえば、ろう文化と聴者の文化のあいだに生じるコードの差異による翻訳の制約）の双方において問題点を抱えていることや、障害者が情報の「発信者」といよりも、むしろ「受信者」としてのみ限定的に想定されていることを明らかにしていく。

テレビの吹き替えが形成する外国人に対する固定観念

野中　昭彦（中村学園大学）

近年、外国人に対するインタビューをテレビで放送する際、発言者の母国語で答えるとき、画面下に訳語が施されるのみならず、吹き替えを重ねる演出が目立つようになった。この吹き替えは声優によって行われ、明るい、気さくといった印象を与えるような話し方がなされる。また、言葉遣いも敬語だけではなく、常語が用いられることが多い。ただ、他のいかなるインタビューであっても、同じように日本人が答えることはない。そこにはメディアが一方的に決める民族や職業、性差などの先入観が混入している可能性がある。なぜなら登場する人物が外国語を話す時、その人物の外見的特徴と吹き替えの話し方には一定の関係が見え、そうした雰囲気はメディアの側が決定していると考えられるからである。どのように話しているかをどう感じるかは本来視聴者の選択であり、こうした演出はいわば外国人に対する先入観を視聴者に植え付けることにつながる可能性がある。

小論では、実際に放送された外国人に対するインタビューから発言だけを抽出し、文章からどのような人物が話をしているか想像してもらった。研究の参加者には音声は聞かせておらず、話者の国籍、民族などは一切明らかにしていない。その結果、敬語を用いた時には性差や職業、民族などの特定には至らなかったが、常語を用いた時には、性差、職業、民族、そしてその人物の印象において多くの参加者の間で一致した。特に常語でインタビューに答えるのは日本人以外であり、その民族性や服装などが話し方から類推できたのである。メディアを通した外国の文化、言語に対する先入観形成の過程とその潜在的影響を議論する。

B 会場（B47）	**研究発表**	**地域**
Room B	**Presentation**	**Regions**

共同制作現場における「遊び」のコミュニケーション
ー三宅高校ファッションショーを事例としてー

大西　未希（東京大学）

中・高校の部活動、文化祭など、一定期間を共に過ごしながら同じ目標に向かう集団のなかでは、何らかの「遊び」が生じることがある。それはその所属集団のなかでしかわからないお約束のようなものであったり、行っている活動とは無関係のものであったりする。このような「遊び」は、メンバー間のコミュニケーションを円滑にしたり、メンバーシップを構築させることに繋がると言われることある。

所属集団のメンバーたちは、所属集団の活動に関する会話や行為を繰り返し、相互に関係性を再構成し続けている。そうした人々の一連の相互行為は、あらかじめ定義づけられた概念によって本質を把握できる実態ではない。行為者が個別具体的な実践を通して構築するものである。そのなかで、本質的には活動に必要でない、活動に直結するものでない「遊び」とは、どのような経験であるのだろうか。

分析対象とした都立三宅高校ファッションショーの準備を行う被服室のなかでは、先輩から後輩に口承でノウハウを教えるという活動の特徴から、会話のしやすさを促すコミュニケーション環境が培われていた。活動を行うなかでできたモノに落書きをすることから始まる「遊び」など、「遊び」の時間があるフレームが、日常的な相互行為のうちから構築されている。積極的に会話に参加したり、遊びの行為に参加したりしないメンバーの中にも、このフレームは認識されており、「遊び」が始まる時間に笑うなどの同調行為をみせている。「遊び」のフレームは、安定したフレームのなかによる相互行為のみではなく、緊迫した雰囲気をもつコミュニケーションを回避したり、会話を促すことにも繋がるものであることをメンバー同士が認識しながら行われている。

「まちづくり」における合意形成のコミュニケーション研究
ー合意形成における地域の歴史活用を中心にー

久保　健治

近年、政府の地域創生施策を受けて地域振興、まちづくりが活発化している。過去の日本におけるまちづくりは基本的に「箱もの」であり、建築物を作る事で「何もない」地方に新たな観光資源を作る事が目的になったものが多い。だが、その施策の多くは一時的に成功したものの、持続的な観光資源としては成功しなかったケースが多い。

上記を受けて、昨今ではコミュニティデザインという手法をはじめ、建築物ではなく地域そのものをデザインする手法も取られている。その中で重要なものの１つが地域住民による合意形成であり、そのためのコミュニケーションである。街づくりのコミュニケーションは、行政による住民説得から地域住民間における合意形成へとシフトしている。

しかしながら、地域住民におけるコミュニケーションは地域住民間におけるインセンティブ構造が多岐にわ

たるため合意形成が難しい傾向がある。特にまちづくりに関わる住民の多くは本業を抱えながら実施している傾向が強く、時にはまちづくり施策が生み出す利益が参加者間で相反する事もありえる。だが、このような状況でも、地域の特色を活かした方法で合意形成を生み出した地域や街づくり団体が存在している。

本稿では建築物ではなく広く地域振興という「町づくり」において実施された合意形成におけるコミュニケーションに着目し２つの地域の事例を紹介する。１つは千葉県香取市佐原町における佐原の大祭を巡る事例。もう一つは筆者が関わっている香川県三豊市の街づくりを進める一般社団法人による古民家再生である。

両者は時間的には隔たりがあるが共に重要な役割を果たしたのが、地域の歴史に基づく地域デザインであり、それを証明するエビデンスとしての史料ならびに史料発掘であった。　本発表では上記事例を通じて、地域の歴史を活用した合意形成のコミュニケーションの可能性と今後の課題について論じる。

神楽とコミュニケーション
－鷲宮催馬楽神楽保存会のフィールドワークから－

櫻井　拓也（東京電機大学）

コミュニケーション研究は、説法、儀式、託宣などをコミュニケーション行為と捉え、宗教的な意味や機能における、コミュニケーションの役割や過程を描くことに関心を寄せてきた。今日のような科学技術を中心とした社会においても、祈りや呪文、民俗芸能のような宗教的行為は、その重要さを失わず、存在感のある「コミュニケーション」として考えられているが、体系だった研究も少なく、他分野との連携もあまり進んでいない。一方、人類学や社会学の数多くの研究が、機能主義的アプローチや象徴論的アプローチから、民俗芸能や宗教儀式を「コミュニケーション」と捉えて考察して久しい。しかし、特定の機能や意味を担うコミュニケーションとして民俗芸能や宗教儀式を捉える考えが根付いてきている一方で、宗教的なコンテクストの中で、改めて「コミュニケーション」そのものを問うような研究は少ない。そこで、本稿は、現代のコミュニケーション研究が陥る諸問題を掘り下げた上で、民俗芸能を「コミュニケーション」として捉え直すことを試みる。具体的には、関東一円に広まった江戸里神楽の源流とされる鷲宮催馬楽神楽（埼玉県久喜市）の保存会の参与観察から得られたデータを基に、「コミュニケーション」としての神楽を考察する。神楽に関係する事象がそれらとかかわりのある人々にとって、具体的にどのような形でコミュニケーションとして経験されたり実践されたりしているのかを、「コミュニケーション」としての神楽の考察を通して試みることが本稿の目的である。

B 会場（B47）	**研究発表**	**デジタルメディア**
Room B	**Presentation**	**Digital Media**

企業が大学新卒者に求めるコミュニケーション能力
ーウェブサイトの「求める人材像」分析を通してー

野島　晃子（立命館大学大学院）

企業が大学新卒者の採用に際し、コミュニケーション能力を重視している傾向にあることは、社団法人日本経済団体連合会（2012, 2014）のアンケート調査結果や、厚生労働省がおこなった調査結果からも明らかである。「新卒採用に関するアンケート調査」結果（社団法人日本経済団体連合会 2013）では、採用選考時に最も重視した要素は 10 年連続でコミュニケーション能力が第 1 位を占めている。また、「若年者の就職能力に関する実態調査」（厚生労働省 2004）の結果でも、コミュニケーション能力が重要視されていることがみてとれる。しかし、同時に、企業が大学生に不足している要素としても、コミュニケーション能力をあげていることが、複数の調査結果（社団法人日本経済団体連合会 2011, 独立行政法人労働政策研究・研修機構 2012, ベネッセ 2011 など）からわかる。つまり、大学生に求められる能力とその実力との間にずれが生じているといえる。

本稿では、このずれの原因を「コミュニケーション能力」という共通のことばを使用しながらも、この能力が指す具体的な要素が回答者によって違うことにあるのではないかという仮説を立てた。そこで大学新卒者が就職するに際し、企業が求めている能力の構成要素を明らかにすることで、意識のずれの原因を探ることができるのではないかと考えた。

現在の日本を牽引する大手企業 100 社が採用活動にあたって大学新卒者に求めている要素を企業のウェブサイトから分析し、社団法人日本経済団体連合会（2013）のアンケート調査結果との比較を通して、企業が求めているコミュニケーション能力の要素とその概念を考察した。その結果、「話す」「聞く」といった、ことばを使ったコミュニケーションのごく基本的な能力の要素から、「他者と協働する」といった要素まで、コミュニケーション能力というひとつのことばに含まれる要素の範囲が広いことがわかった。

Circulation of Affects in Digital Culture:
ーA Case of the Japanese Hostage Crisis in 2015ー

Naoki Kambe (Rikkyo University)

During the Japanese hostage crisis in January 2015, we witnessed a variety of public discourses circulated and disseminated rapidly via social networking sites such as Facebook and Twitter. Because of their shifting texts and contexts and varying rhetors and audiences, these discourses pose critical methodological questions for critics regarding how to analyze them and account for their cultural meanings. Given these characteristics, I argue that a critical lens tuned to concepts of circulation and affect is the key to understand these circulated/circulating and disseminated/disseminating discourses in digital culture. Through this lens, I attempt to show how feelings of fear, shame, anger, grief and hope were mediated and how these feelings were mobilized and manipulated via social networking sites during the hostage crisis.

地元の新聞は奄美群島をどのように語っていたのか？
－奄美群島の終戦・復帰運動のメディア史－

小西　卓三（昭和女子大学）

本発表は、これまで周縁的扱いを受けてきた奄美群島の終戦から復帰運動期の歴史に焦点を当て、現地の新聞が終戦後より 1950 年代まで、どのように奄美群島を語っていたのか考察する。

トカラ列島の日本復帰に影響を受け、小笠原、沖縄の日本復帰に影響を与えたとされる奄美群島の復帰運動史については村山とエルドリッヂがそれぞれ優れた通史を執筆しており、エルドリッヂは復帰運動を「確固たる、非常によく組織化された」ものと呼び、成功をおさめた社会運動として検証している。両書籍は、米軍との群島の武装解除交渉をおこなった高田利貞の語りを復帰運動史の始まりに配置することで、日本復帰という勝利に終わった運動に、勝利を予期する序曲を奏でる。「奄美群島」が「北部琉球」と武装解除文書に記載されている限り署名はしないと米軍に迫り、文言を変更させた高田の言論は、その合理性は別として郡民には訴求力が強く、奄美戦後史を語る上でしばしば参照される始点となってきた。

このような群島の復帰史に関する記憶は、近年に構築されたものなのか、それとも戦後間もない頃からつちかわれてきたのか？本発表は、群島のローカル紙『南海日々新聞』と『奄美タイムス』を参照し、活字メディア・ジャーナリストたちが、奄美群島の終戦・復帰運動の過程で奄美をどのような存在として構築してきたのか、メディア論、レトリック論に依拠して描写、検討していく。

C 会場（B46）	研究発表	伝承
Room C	Presentation	Folklore

次世代の語りに求められるもの
－水俣病を伝える事例を通して考える－

池田　理知子（国際基督教大学）

2013 年 10 月 4 日、「水銀に関する水俣条約外交会議」への出席者に配布する目的で作られた冊子『終わらない闘い』（水俣病を語り継ぐ会，2013）の出版報告を兼ねた記者会見が、水俣市立水俣病資料館で開かれた。報告を行ったのは、会の代表である吉永理巳子と冊子の編集に携わった筆者、そしてその冊子のなかに講演録が収録されていた南アユ子であった。筆者の問いかけに答える形で冊子のなかに書かれてあることを南が説明することに、そのときの記者会見の大半は費やされた。終了後、呆然とした様子で座っているひとりの男性がいた。資料館職員である 40 代のこの男性は、彼女の息子と同級生なのだという。水俣病のひどい症状が彼女の息子にもあることが語られたことがショックだったようだ。

このエピソードが伝えるのは、語られた内容を自分の身に引き寄せて聞き手が考えるためには、単なる事実の羅列ではなく、話の中身に「リアリティ」が必要なのではないかということである。40 代でも水俣病の症状がある人たちがいることは、資料館の職員であればどこかで聞いたことがあったはずだ。しかし、同年代の身近な人物に症状があることが語られたことにより、これまでにないさまざまな思いがこの男性のなかで沸き起こったに違いない。南の話はそれだけ彼にとっては「リアリティ」に富んだものだったということなのではないか。

公害がひどかった時代を体験していない、いわゆる次世代の語り手は、そのときの南のように「リアリティ」のある語りができるのだろうか。今回の発表では、次世代が公害の「歴史」を語り継ぐうえで聞く者の記憶に残るような語りができるのかどうかを考えていく。

「介護の魅力」についての一考察
－他者の物語を共有する営みについて―

五十嵐　紀子（新潟医療福祉大学）

日本の高齢者人口がピークを迎える 2025 年には、介護職が現在よりさらに 100 万人必要になるという試算が厚生労働省（2014）より示され、今後さらに加速する少子高齢社会を前に、介護人材の不足に対する不安は大きい。国や各職能団体は介護への入職希望者拡大に向けた、介護の魅力をアピールする様々な事業を行ってきた。しかし、介護報酬の減額、低賃金に過酷な労働、離職率の高さ、虐待などのニュースを目にしない日はないほど、社会は介護に関するネガティブな情報で溢れている。

一方で、介護に従事する人たちの中には、ネガティブな職業ステレオタイプには全く当てはまらないどころか、介護の魅力にはまっている人々もいる。介護職の魅力についての発信はされてきたが、その評価や検証研究はこれまでほとんどされてこなかった。介護の魅力にはまる人はどのような気づきを得ているのかということを分析し、それを発信していくことが、介護従事者の離職を防ぎ、今後、さらなる介護従事者を確保してい

くために重要であると考える。

本研究では、特別養護老人ホームにおけるフィールドワークで、ある女性利用者Ｔとの出会いにより生じた発表者自身の認識の変化という現象を、同施設長が出演したラジオインタビュー番組での語りと交差させながら分析した。介護の魅力を、被介護者の物語を共有するという視点から論じていく。

第 45 回年次大会実行委員会　Annual Convention Committee

大会実行委員長　Program Chair
森泉　哲（南山大学短期大学部）　Satoshi Moriizumi (Nanzan Junior College)

大会実行委員　(50 音順)

浅野　享三	（南山大学短期大学部）	Keizo Asano	(Nanzan Junior College)
今井　達也	（南山大学）	Tatsuya Imai	(Nanzan University)
佐藤　良子	（愛知大学）	Yoshiko Sato	(Aichi University)
高井　次郎	（名古屋大学）	Jiro Takai	(Nagoya University)
花木　亨	（南山大学）	Toru Hanaki	(Nanzan University)
平田　亜紀	（愛知淑徳大学）	Aki Hirata	(Aichi Shukutoku University)
福本　明子	（愛知淑徳大学）	Akiko Fukumoto	(Aichi Shukutoku University)
藤巻　光浩	（静岡県立大学）	Mitsuhiro Fujimaki	(University of Shizuoka)
宮崎　新	（名古屋外国語大学）	Arata Miyazaki	(Nagoya University of Foreign Studies)

オンライン受付及び大会運営サポート：トップツアー株式会社　東京法人西事業部

実行委員（CAJ）　CAJ Committee Members

①大会プログラム・学術局関連　Convention Program

責任者	守崎　誠一	（関西大学）	Seiichi Morisaki	(Kansai Univ.)
	野中　昭彦	（中村学園大学）	Akihiko Nonaka	(Nakamura Gakuen Univ.)
	吉武　正樹	（福岡教育大学）	Masaki Yoshitake	(Fukuoka Univ. of Education)
	森泉　哲	（南山大学）	Satoshi Moriizumi	(Nanzan Univ.)

②大会プログラム・発表査読者　Review Committee

坂井　二郎	（東京福祉大学）	Jiro Sakai	(Tokyo Univ. of Social Welfare)
野中　昭彦	（中村学園大学）	Akihiko Nonaka	(Nakamura Gakuen Univ.)
宮崎　新	（名古屋外国語大学）	Arata Miyazaki	(Nagoya University of Foreign Studies)
守崎　誠一	（関西大学）	Seiichi Morisaki	(Kansai Univ.)
吉武　正樹	（福岡教育大学）	Masaki Yoshitake	(Fukuoka Univ. of Education)

③受付・事務局関連　Registration

責任者	清宮　徹	（西南学院大学）	Toru Kiyomiya	(Seinan Gakuin Univ.)
	高井　次郎	（名古屋大学）	Jiro Takai	(Nagoya Univ.)
	鳥越　千絵	（西南学院大学）	Chie Torigoe	(Seinan Gakuin Univ.)
	森口　稔	（京都外国語大学）	Minoru Moriguchi	(Kyoto University of Foreign Studies)
	森　拓也	（トップツアー）	Takuya Mori	(Toptour Corporation)

④大会広報関連　Advertisement

責任者	高永　茂	（広島大学）	Shigeru Takanaga	(Hiroshima Univ.)
	小山　哲春	（京都ノートルダム女子大学）	Tetsuharu Koyama	(Kyoto Notre Dame Univ.)
	今井　達也	（南山大学）	Tatuya Imai	(Nanzan Univ.)

コミュニケーション学会　会長及び本部（学会事務局）President and Office of the CAJ

会 長　President　五島　幸一　（愛知淑徳大学）　Koichi Goshima (Aichi Shukutoku U.)

学会事務局　CAJ Office：

〒814-8511
福岡市早良区西新６－２－92
西南学院大学文学部外国語学科
清宮研究室内
日本コミュニケーション学会事務局
Phone:　092-823-4541
E-mail: cajoffice@caj1971.com

Department of Literature
Seinan Gakuin University
6-2-92 Nishijin, Sawara-ku, Fukuoka, 814-8511　Japan
The Office of the Communication Association of Japan
Phone: 092-823-4541
E-mail: cajoffice@caj1971.com

入退会、住所等変更、会費納入、及び学会誌バックナンバーと記念図書購入申込に関する問合せ先：
For inquiries regarding membership, dues, and publications:

一般社団法人　学会支援機構
〒112-0012 東京都文京区大塚5-3-13
小石川アーバン4F
Phone：03-5981-6011　FAX：03-5981-6012
E-mail: caj@asas.or.jp

Association for Supporting Academic Societies
Koishikawa Urban 4F
5-3-13 Otsuka Bunkyo-ku Tokyo, 112-0012

確かな人間関係のためのコミュニケーション論

森川知史 著

A５判 224 ページ・1714 円+税

ことば・身体・記号をキーワードに、コミュニケーションの本質に迫る。

新編「私的には……」からの脱出

千古利恵子・張貞京・中條敦仁・真下知子・森川知史・横谷一子・渡邊浩史 著

A５判 128 ページ・1000 円+税

間違いなく伝わる表現技法を手に入れ、自分の殻を突き破れ！

京都書房ことのは新書 …… 各 192 ページ・740 円+税

人と向きあい
自分と向きあうために

**今考えたい
人と向きあう力**

森川知史 著

共有する時間の
「質」を高める
「共感のことば」とは。

**こころを動かす
共感のことば
説得のことば**

鈴木　健 著

読み続けて
書き続けて
ことばの玩具箱を
満タンに！

**ゆっくり前へ
ことばの玩具箱**

ひきたよしあき 著

http://www.kyo-sho.com

京 都 書 房

〒 612-8438　京都市伏見区深草フチ町 5
TEL 075-647-0121

コミュニケーション論をつかむ

辻 大介・是永論・関谷直也 著

テキストブックス[つかむ] 2160円

コミュニケーションとは,いったいどういう営みなのか。身近な事例を切り口に,学際的・複眼的な視点で読み解く入門書。

多文化世界 原書第３版

―違いを学び未来への道を探る―

G.ホフステード／G.J.ホフステード／M.ミンコフ 著
岩井八郎・岩井紀子 訳　A5判 4212円

データにもとづく組織の比較文化論。世界的ベストセラーの翻訳。グローバル化の時代になにが求められるか？世界的ベストセラーの翻訳。

関わりあう職場のマネジメント

鈴木竜太 著　四六判 2700円

人と人との関わりあいが,職場を,そして組織を強くする！個人と組織をつなぐ「職場」に光を当て,活力に溢れた組織を作るための答えを導く。

学習を促す組織文化

マルチレベル・アプローチによる実証分析

北居 明 著　A5判 3996円

個人と組織にまたがる組織文化のダイナミズムをマルチレベル分析から解明する。

スケープゴーティング

―誰が,なぜ「やり玉」に挙げられるのか―

釘原直樹 編　A5判 2808円

大きな事故・災害の際に生じる特定の対象への非難のメカニズムについて,実証研究から解明。

デザインがイノベーションを伝える

デザインの力を活かす新しい経営戦略の模索

鷲田祐一 著　四六判 2160円

製品開発におけるデザインの重要性と可能性を,マーケティングの視点から提示。

はじめて学ぶ 異文化コミュニケーション

―多文化共生と平和構築に向けて―

石井 敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊行・石黒武人 著　有斐閣選書 2160円

多文化社会に生きる現代の学生・社会人に必要な,知識と考え方を提供。

ケースで学ぶ 異文化コミュニケーション

―誤解・失敗・すれ違い―

久米昭元・長谷川典子 著　有斐閣選書 1944円

身近な誤解,失敗,すれ違いに関するケースを題材に,異文化コミュニケーションの概念や考え方を解説する入門書。

yuhikaku 有斐閣 出版案内（価格は税込）　東京・神田・神保町2 TEL:03-3265-6811
http://www.yuhikaku.co.jp/

◎図書目録送呈◎

Campus Support Seinan is a proud CAJ sponsor!

Language Services

Our team of bilingual translators provides swift and precise Japanese to/from English translations to clients of various linguistic needs.

- As each member of our team is fluent in both English and Japanese, we are able to compose translations with robust accuracy while preserving - in full integrity - the nuanced undertones that are so often lost in translation.
- Aimed at bridging the gap between English and Japanese communication, other services we provide include **interpretation, linguistic training,** and **international exchange logistics.**
- We proudly serve clients in prefectural government, local municipalities, and a total of six universities throughout Japan.

General Printing

(posters, flyers, business cards, Holiday cards, etc.)

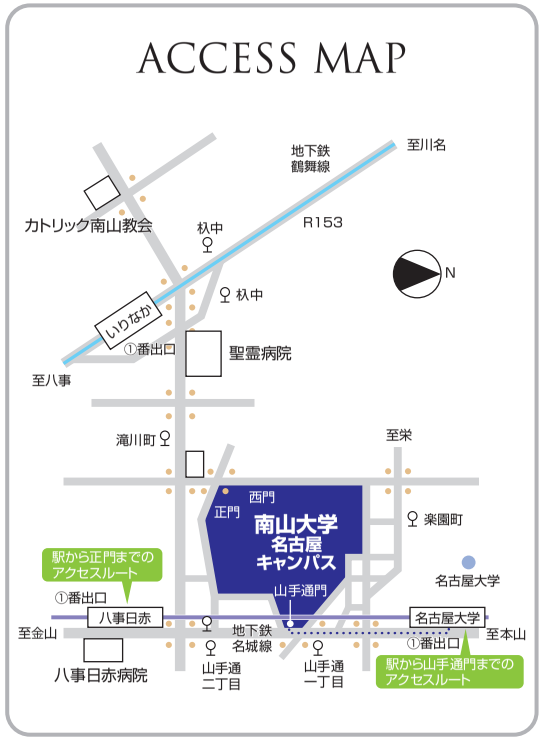
Event Operations Management

(Seinan-related Concert Management, Official TOEIC Venue Operations)

Seinan Gakuin Official Merchandising

(ball-point pens, Japanese fans, pouches, Seinan Tirolian, Senafi, etc.)

Campus Support SEINAN

1-14-29 Momochi, Sawara Ward, Fukuoka 814-0006
Tel: +81 92-823-3576 Fax: +81 92-823-3590
www.cs-seinan.co.jp

南山大学　キャンパスマップ